



験”をしっかりと身につけさせることで、後のポリクリや国家試験にも良い影響を与えられる。

- ⑪ 卒業判定で卒業生数を絞ると、“母校のために働く！”という気概を失わせ、母校の大学に残らなくなってしまう可能性が大と思われる。
(塩沢先生のご意見)
- ⑫ 例年低い“過卒生の合格率”を上げるために(一年間勉強の集中力を維持するために)は、予備校の利用や毎日の規則正しい生活リズムの維持が重要であろう。(現役生にも合宿を行っている大学有り、成果を挙げている。)

※最後に107回国家試験に向けてのアドバイス・提案がありました。

『106回国試は、現在の日本の医療事情を反映した実践的な良問が多い。「国試対策」「臨床実習」のように分けて考えるのではなく、一医療人として日常的に経験する全てのことが臨床実習、卒業試験や国家試験の合格、さらには医師としての活躍という一連の流れに密接に関わっていることを自覚して頂きたい。』

[提案①] 満遍ないスタンダードな学習

どうしても試験が迫ってくると出題されやすい順の学習となり、学習が偏りがちとなる。また、答えの暗記に終始したり、キーワードから診断をはじめ出すような学習の一辺倒になってしまう受験生が多い。なるべく早期から学習を開始し、幅広い範囲の医学的現象を病態生理に基づいて丁寧に整理していくこと。また難問・

奇問の類に拘泥するのではなく、あくまでスタンダードな良問をこなすこと。これらが重要。

[提案②] 臨床実習を軽んじない

勉強会などが本格化してくると、臨床実習をしている時間をもったいなく感じることもあることは否定しない。外来や手術の見学に膨大な時間がとられてしまう現状の医学教育を全て肯定するわけではない。ただし、実際に体を使って覚えた知識というのは忘れないものである。理屈では説明のつかない勉強がそこにはある。臨床実習には積極的に参加し、患者さんに傾聴し、現役臨床医とディスカッションをし、手技や器具に慣れ親しむことを勧める。

[提案③] 質のみならず量にもこだわった過去問演習

第90回台からのプール問題も多く出題されている。洗練された良問を丁寧に解き、病態に対する理解を深めることも大切だが、それと同時に行えるだけ多くの問題をこなす腕力をつけてほしい。その点から質のみならず量にもこだわった学習をすべきであろう。

等々多くの情報を伺え、“医師国家試験”対策の重要性を肌で感じた有意義な講演会でした。

今後、琉球大学医学部医学科の国家試験合格率を上げるために、学生のみならず大学、教員、指導医、皆で取り組むべき課題が色々と浮かび上がってきた数時間でした。

[by. 5期生；同窓会副会長；琉球大学医学部医学科 医学教育企画室；屋良さとみ]

